『週刊ポスト』2019.5.20(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

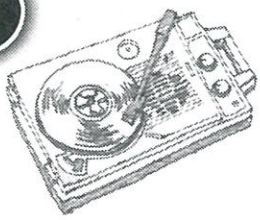
第78回 作詞家・吉田旺が紡いだ「3分ドラマ」の世界

私のお気に入りの映画に『ショーシャンクの空に』という脱獄をテーマにした作品があります。スティーブン・キング作の原題は「刑務所のリタ・ヘイワース」で、マリリン・モンロー以前の米国のセックスシンボルだったヘイワースのポスターが重要な役割を果たす痛快作です。

ヘイワースといえば、日本では主演映画『雨に濡れた欲情』が昭和29年に公開、サマセット・モームの「雨」を原作にした映画なのでエロティックなシーンを求めて観ると失望しますが、そこはあえて扇情的な邦題をつけて男心の歓心を買おうとする戦略だったのでしょう（映画の原題は彼女が演じた女性の名）。

勘のいい歌謡ファンはお気づきかもしれませんが、この映画の邦題はちあきなおみのデビュー曲、昭和44年発売の『雨に濡れた慕情』と似ていますね。別の意味で勘のいい読者の方は一条さゆりさんのロマンポルノ『濡れた欲情』を思い出されたかもしれませんが。

『雨に濡れた慕情』の歌詞を提供したのはこの作品が自らの作詞家デビューでもあった吉田旺（おう）です。吉田はちあきのデビューから3枚目のシングルA面までの作詞を任されますが、大ヒットには至らず、2年の空白後、作曲家・中村泰士とのコンビで捲土重来を期します。



ちあきの第12弾シングルとして昭和47年に『禁じられた恋の島』を提供しますが、この曲名もまた昭和38年に日本公開されたイタリア映画と同名でした。さらにこのあと『喝采』（グレース・ケリー主演。原題「カントリーガール」）、『夜間飛行』（原題「ナイトフライト」）と往年の米国映画と同名の歌をちあきに提供します。拝借は曲名のみで、吉田はどれも独自の「別離の物語」に仕立てていますが、ほかの歌手には感じない「劇的な物語性」をちあきの歌に感づいていた証でしょう。

『喝采』の歌詞は時間軸を交差させた5部構成になっていますが、主人公の歌手がエンディングでスポットライトに照らし出されるシーンはモノクロ画面がカラー映像に変わるような展開が秀逸で、にっかつロマンポルノ以前に隆盛を極めたピンク映画のパートカラーにも通じる劇的効果をもたらしていました。

平成元年発売のアルバム『喝采～紅とんぼ　吉田旺　参分劇（さんぷんどらま）』は、吉田とちあき二人のデビュー曲だった『雨に濡れた慕情』から実質的に昭和最後の年といえる昭和63年10月発売の『紅とんぼ』まで、他人のカバー曲を含めた12曲が収録されています。

全曲を通して聴くと、主人公のちあきが演じる1本のオムニバス映画を観終えたような気持ちに襲われます。そこには間違いなく吉田旺が紡ぐ「昭和に生きた女性」の物語がくっきりと映像化されて現われてくるからです。

ちあきと吉田のデビューから半世紀、すでに平成も幕を閉じた今、吉田作品とその主人公を演じたちあきなおみは昭和の遺産です。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中